

第2回中学校におけるこれからの部活動の 在り方を考える有識者会議 議事要旨

日 時：令和7年12月16日（火曜日） 午前10時から正午まで
会 場：都庁第二本庁舎31階 特別会議室27
出席委員：10名

1 開会

東京都教育委員会挨拶

2 概要説明

- (1) 国の動向について
- (2) 東京都の現在について
- (3) 「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」骨子（案）について
- (4) 「東京都における中学校の部活動改革に関する推進計画」骨子（案）について

3 協議

協議テーマ「東京都の中学校におけるこれからの部活動の方向性」

- (1) 「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」骨子（案）について

- ・認定制度に付随した取組として、地域スポーツの担当部署、文化振興担当の部署及びスポーツ協会の連携・協力が不可欠である。
- ・市部は、広いエリアに配置されており、地域によって人材や資源が異なっている状況があるため、地域展開と地域連携の両輪で進めていただけると有難い。
- ・国のガイドラインに活動時間・休養日等の設定について記載があるが、地域展開や拠点校のように生徒が移動して行う場合、教員の負担が増えないように、また子供たちの実態に合わせて、より柔軟に運用できるようになったことは、今後取り組みやすい。
- ・部活動や拠点校方式、地域クラブ活動等、参加形態が多様化してきているため、不公平にならないような大会運営を競技ごとに考えている。大会運営に関しては、地域クラブ活動の代表者が役員として参加してくれる競技はあるが、まだまだ少ない。
- ・大会運営に負担を感じている教員は多い。今後の持続的な運営について、地域の文化活動の関係者や、ボランティア等の外部人材の参加促進、外部団体に運営を委託していくことなどを含めて、教員に過度な負担をかけない適切な体制を整え、持続可能で効果的な大会運営の在り

方を引き続き検討していきたい。

- ・文化系活動は、指導者資格がない分野もあり、認定地域クラブ活動の指導者として、人材を位置付ける仕組みがあると、生徒や保護者、学校にとっても非常に安全、安心である。例えば、条件付きの登録を行って、一定期間指導した後に本登録にするなどの制度も検討する必要があるのではないか。
- ・部活動を負担と感じる教員が多い一方で、部活動に関わりたいという教員も約半数はいる。国のガイドラインには兼業・兼職が示されているが、同調圧力とならないよう、本人の意思を尊重した教員の兼業・兼職の在り方考えていくべきである。
- ・部活動において、生徒が主体となって取り組んできた部員募集の説明会など、生徒が考えて取り組む活動は、教育的意義の継承・発展という視点から、地域展開した場合も大切にする必要がある。
- ・生徒が安心・安全に参加できるということは非常に重要である。体罰や不適切な行為の防止、さらに部活動における健康面での留意事項として、熱中症の理解や予防についての記載がされていることは非常に重要である。
- ・生徒への指導について、生徒の特徴や配慮事項に関する研修メニューの記載があるが、この部分は非常に重要な部分でありながらも、そこまでできる指導者については限定的になる可能性がある。特別支援学校の場合は、初めから全てを地域の人材に任せるよりは、部活動指導員等と連携しながら、指導に携わっていくことが現実的ではないか。一方で、地域クラブ活動には、優れた指導者もいるので、双方が生徒の特性を理解して学んでいくことが大事である。
- ・都のガイドライン骨子（案）で、「部活動の在り方」を第一にもってきていることは、「改革ありき」ではなく、ここから作り上げていくという視点をもたれていることに安心した。
- ・保護者が一番最優先で考えているのは、子供たちが安心・安全に取り組むことのできる環境を構築していただきたいということ。都のガイドライン骨子（案）にあるように、特に体罰や事故防止に向けた安全対策、健康面での留意事項を追記されていることに関して、より具体的に提起している点について、都の姿勢として受け取れた。
- ・昨今は、ライフワークバランスや男性の育休等、家庭を大事にしながら仕事をしていく流れの中で、教員も働き方改革を進めていく必要がある。教員の担い手確保という点からも、長期スパンの中で、この視点を取り入れていく必要がある。
- ・地域クラブ活動を新設するというのが、都のガイドライン骨子（案）から読み取れるが、可能な種目と難しい種目がある。現在、既にある団体と上手く連携を図りながら、地域展開を進めるということは可能性があると思うが、一概にうまくいくとは限らない。よく協議しながら、時間をかけて進めていく形になるのではないか。
- ・都のガイドライン骨子（案）には、指導者や教員等を目指す大学生への実践機会の提供が人材育成につながることを示されている。都立中学校の地域展開の事業において、学生が指導に携わる中で、指導補佐として経験を積めるということが極めて良い機会となっている。このようなスモールステップの経験を踏まえて、指導に携わる人材の確保とともに、大学の認知が拡大していくと、

大学としても有難い。

(2)「東京都における中学校の部活動改革に関する推進計画」骨子（案）について

- ・目標については、生徒の活動機会の確保・充実が第一にこななければならないと考える。続いて、教員の働き方改革。この２点が、目標を設定する上で核になるものだと考える。
- ・成果指標について休日は地域クラブ活動、平日は部活動など、共存していくことも十分に考えられることから、部活動と地域クラブ活動を分けて満足度を測らずに、スポーツ・文化芸術活動とをひとくくりにして満足度を測っていく必要があると考える。
- ・スポーツ、文化芸術活動の満足度ということで考えると、現在、部活動に参加している生徒が非常に多いが、現状でもかなり満足度が高いというような状況がある。満足度の向上も大事で、向上するに越したことはないが、教員の負担が軽減されつつ、子供たちの満足感が維持できればそれも成果と考える。教員の負担については、国のガイドラインの中で、活動時間が１１時間以内と示され、従事時間が減ることも大切であるが、一方で、指導に携わりたくない教員の負担の軽減のためにも、携わらなくてもいい取組から始めることも考えられる。
- ・保護者としても、生徒の活動機会の確保・充実を目標にしていきたい。選択肢と同時に、活動量がどのくらい増えたか、また自分が希望する部活動等に入れるかという満足度も、目標数値としては良いのではないか。
- ・学校の中だけの活動だと、地域から見えないこともあると考えられる。できれば、地域も子供の教育と一緒に参画していただきながら、地域ごと全体で支え、子供を育てていくことが必要である。そういう中で、子供も地域に愛着をもったり、様々な人との関わりの中で、生き方の幅を広げていききっかけにもなったりするのではないかと考えている。
- ・卒業生・保護者にアンケートをとる機会があったが、どういう環境で、どういうものを学ばせたいかというところでは、仲間と一緒に楽しめる活動が大事だという意見が多かった。地域単位で活動していく経験ができると、子供たちにとっても非常に大きい。これから豊かな生活をしていくためには、地域の中でいかに過ごしていけるかが、非常に重要なテーマになるのではないか。
- ・都と各区市町村の取組の進捗状況を確認するためにも、３年後の中間評価は、大切だと考える。アンケートや情報交換による意見が非常に大事になっているようだが、年数が経つと、今回のように国の取組や都の取組も変わってくるので、それに応じて各区市町村の状況も変わる。引き続き、情報交換等を行い、各地区の進行状況を共有していただけると、非常に有難い。
- ・子供たちを中心に考えるべきであるということ。目標や成果指標の設定期間については、一概に３年後や６年後という設定で一括りにしてしまうと弊害もあるように感じる。大きな指針として、３年後や６年後という期間を設定しつつ、生徒を置き去りにしないように、地域の状況に応じてスモールステップで、丁寧に状況を確認しながら取り組むことが大事である。
- ・改革実行期間の前半、後半で、部活動を継続しながら、活動場所や活動に必要な用具等、何が必要で何が不足しているのかについても考えて地域展開に取り組んでいただきたい。生徒も保護者も、教員も納得することが大事であり、この改革があつてよかったと思えるような、動きになっ

ていくと良い。

- ・学校によっては、工夫をして様々な種類の部活動を実施している。週に1、2回の活動で土日は活動していないというような部活動があり、大会を目指すというよりも、子供たちの放課後の居場所づくり、教員と子供の絆づくりといったものとして機能している。このような部活動も、重要なものだと考えており、教員の負担にならない範囲で学校に残していくことも必要ではないか。
- ・東京モデルで、地域展開をした場合にも、学校は地域の一部として関わりをもつことになるという方向性が示されたことは、説明もしやすいし、非常に明確で良い。国は、まずは休日の部活動を地域展開すると示しているが、平日も負担が大きい。地域の団体を運営主体にしたり、拠点化したりすることで、平日も休日も一体化して進めていくことは、学校にとっても、子供たちにとっても非常に受け取りやすく、教員や学校にとっても非常にいい動きかと思う。
- ・改革推進期間の中で都と情報交換を行う際に、生活文化局やスポーツ推進本部の職員も参加していただいたことは、区市町村として首長部局にも一緒に取り組んでいくお願いをしやすくなった。この改革を進めていく上では、さらに連携しながら進めていく必要がある。
- ・改革実行期間の中で、おそらく自治体ごとに進め方は異なるため、課題の解決方法や好事例の情報共有を、分かりやすく見える化できると、安心感が出てくる。
- ・地域展開が困難な地区や学校については、部活動として、そのまま継続するのではなく、教員の働き方改革等も踏まえ、拠点化や、外部人材を活用していくなど、各地区の実態にあった着実な取組が進められるのではないかと考える。
- ・今後、確実に地域クラブの数は増えていくと思うが、中学校体育連盟としては、成果指標となると、目標の数値を設定するのが難しいと思う。やりたい部活ができた、やりたい運動ができた、望んでいる専門的指導が受けられているかというアンケートは、これからも必要だと思う。
- ・大学生の派遣については、どこの大学も考えており、そういった視点で、大学側がどれだけ派遣しているか、どれだけ貢献できているのかを成果として見ていく必要がある。また、自治体と情報共有しながら、お互いに目標を定めて進めていくことが大事だと考える。
- ・一人一人の子供が求めているものが多様になってきており、それを全て部活動として活動できるかという点で困難である。多様な活動を希望する子供たちに、活動を紹介することができれば、様々な活動に参加できるし、人と触れ合うような機会を提供することができる。多様な地域クラブ活動プログラム「YAT」は、このような点からも非常に良い。
- ・「YAT」については、特別支援学校の生徒も参加しやすい環境が整っているのではないかと考えている。軽音楽、eスポーツといった選択肢があるところが非常に魅力的である。生涯スポーツ、生涯学習に発展する取組の一つであり、対象を広げて進めていけると良い。
- ・部活動では難しいけれども、「YAT」のような活動であれば活動できるという子供は多い。ただし、担い手や費用面については考えなくてはならない。今までは、ほとんど無償の形でやっていた部活動を、受益者負担にしていくことについて、この期に考えていく必要もある。一方で、生活保護世帯や就学援助世帯については、一定程度の配慮を考える必要もあると考えている。
- ・関係者間の連絡体制の構築については、東京都全体で考えていくことが大切だが、もっと小さく、

区市町村エリアや学校単位でも、どのように充実させていくかが大切だと考える。

- ・外部人材の活用が進んでいくと、指導者が増えていく。実際、指導者が増えると、採用から管理、謝礼の手続きまで全て学校が担っていくので、事務的な手続等も増える。人材を探すことや情報共有などを行うコーディネーター的な役割の配置については今後の課題である。

(3) 協議のまとめ（座長）

- ・地域展開された場合、子供たちは「参加」ではなく、活動に「参画」することが大切で、部活動で行ってきた活動を、地域でも生かすことができる支援が重要である。
- ・「部活動に満足している」という子供たちのアンケート結果があるが、それは、教員の負担の上に成り立っており、教員の負担がなくなった形で、なおかつ子供たちの満足度が維持できるのであれば、評価をして良いのではないか。
- ・多様な活動を継続的に出来る仕組みは、今までの日本の部活動だけでは難しいが、制度設計をしていく必要がある。自分がやりたいと思ったら、必ずそこにアプローチでき、それを継続するかどうかを本人が決めて、継続したい時にも継続できる仕組みを用意することが非常に重要である。
- ・子供を中心としながら、指導者の方も、保護者の方も、そして関わってくださる方々みんなが高まっていけるような、全体が高まっていくにはどうすればいいのかを考え、学校と地域が、双方にとってメリットがある、双方が喜ぶ環境を作ることが必要である。

4 事務連絡

第3回について

- ・第3回有識者会議は1月中旬頃を予定
- ・第2回の委員の意見を踏まえた東京都のガイドライン本文（案）、推進計画の本文（案）を示し、検討

5 閉会

東京都教育委員会挨拶

- ・地域展開というのは、改革の手法であり、その手法をいつまでにということではなく、3年後、さらには6年後に何をを目指すのかというところを見据えて、中学校における部活動をどう展開していくべきか考えていかなければならないと改めて認識した。
- ・部活動をこのまま地域展開していくこと以外に、拠点化方式や外部人材の活用を選択していくところが、東京モデルの一つのありようである。それによって実現すべきことは、子供の満足感であり、さらに教員の働き方改革である。この両者を両立することは非常に難しく、この3つをうまく組み合わせながら東京モデルとして進めていく形を作り上げたいと考えている。
- ・本日はガイドライン、推進計画の骨子（案）をお示した。次回は、本文（案）を御覧いただき、様々な視点からと御検討いただきたい。